

《研究ノート》

日本語と中国語の指示詞に関する一考察

An Analysis of Demonstratives in Japanese and Chinese

日下部 直美
Naomi KUSAKABE

I. はじめに

日本語における指示詞として「コ系」、「ソ系」、「ア系」があり、中国語の指示詞としては“这”と“那”が挙げられる。これらの指示詞には一般的に「現場指示」と「文脈指示」の二つの用法があり、更に「文脈指示」は「対話における文脈指示」と「文章における文脈指示」の二つに分けられる。前者は聞き手の存在が問題になる場合であり、後者は問題にならない場合である。

日本語の指示詞「コ・ソ・ア」の「現場指示」には対立型と融合型の二つがある。

対立型：現場で話し手と聞き手が離れた位置にある場合

→話し手の近くはコ、聞き手の近くはソ、それ以外はアで表す

融合型：現場で話し手と聞き手が同じ位置にいる場合や聞き手がない場合

→近くのものはコ、遠くのものはア、どちらでもないものはソ

また、「対話における文脈指示」と「文章における文脈指示」は以下のように定義される。

対話における「文脈指示」→話し手と聞き手が共に直接知っているものは「ア系」で指し、そうでないものは「ソ系」で指す

文章における「文脈指示」→文章における文脈指示では「ア系」は使われない

一方、中国語における指示詞“这”と“那”の「現場指示」の使用分布については、以下の通りである。

「現場指示」→指示対象が「近い」と認識される場合は“这”を用い、「遠い」と認識される場合は“那”を用いる

更に、「現場指示」の空間的認識から派生した時間軸における「遠近」も“这”、“那”で示すことができる。

時間的に近い、或いは発話時点に近いうちに行われたコトガラを指す場合

→“这”、“这个时候”、“这时”を用いる

時間的に遠い、或いは発話時点から前に行われた、または後に行われる場合

→過去でも未来でも通常“那”、“那个时候”、“那时”等を用いる

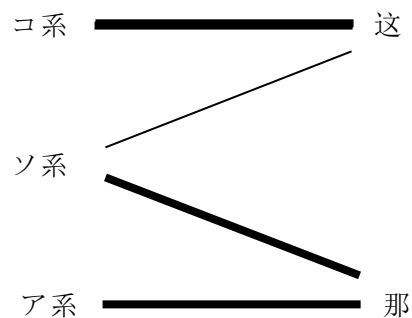
“这”、“那”はもともと空間的な距離、つまり、物理的な距離から生じたものであるため、

客観性をもっていると考えられるが、話し手の主観性、即ち「心理的距離」に大きく関わっている場合もある。

中国語における「文脈指示」においては、王（2004）によると、基本的に「現場指示」の延長線上にあるとのことである。先行する対象を照応させる場合は、いまの話題対象として扱っているため、“这”を用いることが多いが、それとは異なるモノを扱う場合は“那”を用いる。ただし、いまの話題対象を決定するのは話し手の意図によるため、基本的には話し手がその対象に関心に向けているかによって決定される¹。

以上のように、日本語における指示詞は「コ・ソ・ア」の三つが存在しており、中国語においては“这”、“那”の二つがある。中国語教育の現場ではテキストなどにおいて、以下のように示されていることが多い（太線は対応するケースが多いことを示す）。

図1 日本語の「コ・ソ・ア」と中国語の“这”、“那”との対応



本稿では上の図の日本語と中国語の指示詞の様相を踏まえ、中国語話者における誤用例や会話における事例を挙げながら、両者の使用範囲について考察を進めていきたい。

Ⅱ．現場指示

中国語話者は、上述したように、指示対象が「近い」と感じた場合は“这”を用いるため、次のような誤用が生じる²。

- (1) (相手(先生)が手にしている電子辞書を見て、そばにいる中国人学生が尋ねている)

学生：「先生の{??この／その／??あの}電子辞書、どこで買いましたか？」

老师您的{这个／那个}电子词典在哪儿买的？

この場合、中国語話者は対象が「近く」にあると認識した場合は“这”を用いるため、それに対応する「コ系」を用い、「この電子辞書」という誤用をしてしまう傾向にある。このときは聞き手の領域に対象が存在するため、対立型の「ソ系」を用いるべきである。ただし、聞き手の所有物であっても、話し手自身が手にしている場合は「コ系」を用い、話し手および聞き手の両者より離れた場所にある場合は「ア系」を用いる。

中国語では、聞き手の近くにあるもの、すなわち聞き手の領域にあるものであっても、

¹ 王（2004）p.84。

² 例文に付した波線は発話時に選択された表現を示している。

“这”を用いることが多い。対象である電子辞書は、発話時点において聞き手が手に持っているため、聞き手の「近く」にある。そのため、この場合は“这”が用いられる傾向にある。

一方、“那”が用いられる場合は、話し手および聞き手より「遠く」にあると認識した場合である。すなわち、聞き手の領域が話し手の領域に含まれている「包合的視点」によって、話し手と聞き手の領域から遠距離の位置に対象が存在している場合である。また、話し手と聞き手が「対立的視点」によって捉えられ、物理的距離がある場合も“那”が用いられる。しかしながら、近距離であっても、心理的要因によって「遠称」である“那”を選択することもあるため、(1)においては“那”の使用が可となる可能性も考えられる。

また、この場面の発話としては不適格となるが、「電子辞書」が現場に存在しておらず、話し手と聞き手の両者において話題である電子辞書が「共通理解」となっている場合は“那”も使用可となる。この場合は日本語においても「ア系」が用いられる。

木村(1992)によると、中国語においては話し手と聞き手が自他的に意識された「対立的視点」がとられた場合は、近距離の聞き手に属する対象であっても“那”で示され、聞き手の領域を話し手の領域に含めた「包合的視点」がとられた場合は、聞き手に近い対象が“这”で指示されるとのことである³。すなわち、話し手が聞き手の領域にあるものを自分の領域内に存在するものと認識するならば“这”を用いる。“这”に対応する日本語の指示詞は「ソ系」が対応する場合もあるが、主に「コ系」が対応するため、中国語話者は「コ系」を用いた「この辞書」という表現を使用してしまうことがある。この場合、中国語における“这”の使用範囲と日本語における「コ系」の使用範囲を同一視してしまい、このような誤用が現れると考えられる。

また、木村(1992)は、中国語においては聞き手の領域を「包合的視点」で捉え、対象を自分(ワレ)の領域に取り込まれる傾向が強い特徴について指摘している。すなわち、プライマリな常態的状况として「包合的視点」が存在し、「対立的視点」は二次的に成立するものと述べている⁴。張(2001)も、中国語においては、話し手(自分)は相手(聞き手)の縄張りのほぼ全てのものを自分の縄張りに取り入れることができ、「コ系」に相当する“这”を用いて表現することができると述べている⁵。

Ⅲ. 文脈指示

ここでは、「対話における文脈指示」について考察していく。以下の例を見てみよう。

(2) (中国人学生が聞き手(=先生)の授業の感想について話している)

学生：「今日の授業で、先生は日本人の習慣について教えてくださいました。まず、部屋に入るときです。{*このとき／*そのとき／あのとき}、先生はドアを2回叩きました……。」

今天上课的时候，老师教给我们日本人的习惯。首先，走进教室的时候，{这个／那个}时候，老师敲了两次……。

³ 木村(1992) p.190。

⁴ 木村(1992) p.193,197。

⁵ 張(2001) p.5。

先生が授業中に行ったことについて、学生が話しているときの会話である。「今日」の授業のことであるが、中国語話者として既に発話時点において「過去」と認識した場合は“那”を用いる。発話時点または現在に近い過去や未来として認識した場合であれば“这”を用いる。

また、王（2004）によれば、中国語においては現在の「話題」としての対象として取り扱う場合も“这”を用いることがあるとのことである。時空間に関する認識における“这”と“那”の両者の使用に関しては、話し手の主観によるものであるため、話し手が現在の「話題」として見なした場合であれば、過去のことであったとしても“这”を用いる⁶。この場合、中国人学生は恐らく“那”の日本語訳として「ソ系」を用いたと推測されるが、話し手である学生も聞き手である先生も、この「行為」が行われた時点においてその現場におり、両者において「共通理解」である既知のコトガラである。そのため、日本語においては「ソ系」ではなく「ア系」を用いなければならない。“那”には通常「ソ系」と「ア系」が対応するため、このような誤用が生じると推察できる。

また、この場合においては、上に示した日本語と中国語の指示詞の対応図には無い「ア系」が“这”と対応しているケースも存在することが分かる。この対応については、以下に同様の例を挙げ、考察してみる。

- (3) (姉(話し手)が自分の妹とその恋人(彼)の関係について夫(聞き手)と話しており、その関係については姉も夫も以前から知っている。妹はその場にはいない)

姉:「前は(彼は)あの子(=妹)と{?こんなに/??そんなに/あんなに}仲が良くて、何でも言うことをきいてくれたのに、今はまるで別人のようになってしまっ…」

以前他对她{这么/那么}好, 唯命是从, 现在却判若两人……。

以前は妹とその恋人とは仲が良く、妹の言うことを何でも聞いてくれるほどであった。そのことを姉もその夫も知っている。しかし、今は二人の仲が以前と比べてあまり良くない。この場合、二人の仲が良かった様子を話し手である「姉」と聞き手である「夫」の両方が知っており、「共通理解」となっているため、日本語では「ア系」を用いる。ただし、この場面において、例えば、話し手が妹と恋人が仲良く写っている写真を手にしている、または、恋人が妹にくれた贈り物などを見ながらであるというシチュエーションを追加すれば、「コ系」の使用は可となる。すなわち、現場や話し手の領域において二人の仲が良かった様子を確認できるモノが存在する場合に使用可になると推察できる。「ソ系」が用いられるとすれば、例えば、姉が夫から妹とその恋人との関係について、二人が以前は仲が良かったが、今はあまり仲が良くないことを初めて知った場合である。この場合は、姉は二人の関係については知らなかったが、夫は知っていたという状況となり、姉と夫の間において「共通理解」となっているこの場面での発話として不適格となる。

中国語においては、この場面では“这”と“那”の両者を用いることができる。“这”が用いられる場合は、話し手にとっては自分の妹のことについての話題であり、妹は自分に

⁶ 王（2004）p.84。

とって家族である。よって、心理的距離が「近い」存在であるため、自分のことのように考えていると思われる。自分のこととして捉えているということは、以前の妹とその恋人が仲が良かったというコトガラを、上述の「包合的視点」を用いて自分の領域に取り込んでいると窺える。一方、“那”の使用が可となるのは、インフォーマントによると、二人の仲が良かったという状況を話し手が時間的に「過去」として認識している、または、妹とその恋人の関係の悪化が話し手にとって突然のことである場合である。この他にも、「以前」と「現在」との対比を際立たせる場合も“那”が用いられるとのことである。

さらに以下の例を見てみよう。

- (4) (母親 (話し手) のそばにいた子どもが出かけたあとで、その場にいた A (聞き手) に対して)

母親：「{??この／??その／あの} 子ったら、宿題もしないで遊びに行っちゃったわ。」
{这／??那} 孩子，他没做完作业，就去玩儿了。

この場合、対象である子どもがその場に存在しておらず、話し手と聞き手の間で「共通理解」となっている場合であるため、対話による文脈指示である「ア系」のみが用いられる。

中国語においては、“这”は自然であるが、“那”は不自然であるとのことである。これは、(3)と同様に、親子という心理的距離が「近い」ため、「包合的視点」を用いて対象を話し手の領域に含めているためと考えられる。また、インフォーマントによると、この場合の“这”については、母親が子どもに対する「(あの子ったら) 仕方がないわねえ」等といった感情が含まれているとのことである。これは、日本語の文脈指示の「ア系」が話し手の感情移入などの語調を伴う用法と近似しているといえよう⁷。

次に、(4) が独り言の場合について考察してみる。

- (4)' (母親 (話し手) が一人で子どもの部屋にいる。子どもはその場にはいない) (=独り言)

母親：「{??この／??その／あの} 子ったら、宿題もしないで遊びに行っちゃったわ。」
{这／??那} 孩子，他没做完作业，就去玩儿了。

(4)' は独り言というシチュエーションであるが、指示詞の選択は(4)と同じである。この場合、話し手の他に聞き手などの参加者は存在していない。対象も存在していないため、「コ系」は不適格となる。「ソ系」は話し手と聞き手の領域が対立している場合に用いられるため、独り言においては不適格となる⁸。一方、「ア系」の使用については、聞き手が存在していないため、話し手と聞き手における「共通理解」として用いられる「ア系」ではなく、「記憶指示」として話し手の記憶にある対象を指している⁹。すなわち、(4)、(4)' の両者において、聞き手の有無に関わらず、「ア系」は適格となることが分かる。

⁷ 吉本 (1992) p.117。

⁸ 金井 (2017) p.121。

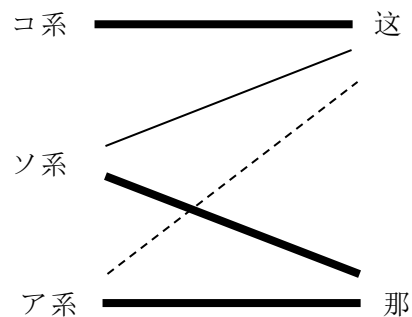
⁹ 金井 (2017) p.123。

中国語の独り言については、木村（1992）が日本語の「ア系」が“这”を用いて訳されている点について指摘している。木村（1992）によると、聞き手の領域が「包合的視点」によってワレの領域に取り込まれる特徴は、独り言においても適用される。すなわち、聞き手の存在がないことから、聞き手との相対的な隔たりが無くなり、対象がワレの領域内のものとして認識される傾向が強くなるとのことである¹⁰。

IV. おわりに

以上、日本語と中国語の「現場指示」と「対話における文脈指示」の指示詞について、中国語話者における誤用例や会話における用例を挙げながら、両者の使用範囲について考察を行った。上に示した日本語と中国語の指示詞の対応図に考察の結果を反映させると、以下のようになる。

図 2 日本語の「コ・ソ・ア」と中国語の“这”、“那”との対応（考察後）



中国語教育においては、中国語の“这”は通常は日本語の「コ系」と主に対应し、一部が「ソ系」と対応すると説明しているが、「ア系」に対応している場合については、教科書レベルでは指摘されていない。そのため、学習者は上級レベルに達してから、文脈指示において“这”と「ア系」が対応している表現の存在に気付くと思われる。

先行研究においても、“这”と「ソ系」の対応について考察したものはいくつか存在するが、「ア系」との対応についての研究はほぼ見られないのが現状である。本稿ではいくつかの例を提示し、それに伴う場面やシチュエーションを設定して考察を行ったが、設定の追加や変更によって、指示詞の使い分けが複雑になることが分かった。今回は視点の概念を一部用いて分析を行ったが、この他にも、モダリティ、共感性、話題化などの概念も用いた上で、更なる検討が必要であると思われる。

参考文献

- 1) 王亜新:文脈指示における日本語と中国語の指示詞の相違—日文中訳作品の実例分析—, 言語と文化 4:83-98, 2004.
- 2) 木村英樹:中国語指示詞の「遠近」対立について—「コソア」との対照を兼ねて—, 大河内康憲・編, 日本語と中国語の対照研究論文集（上）, くろしお出版, 東京, 1992, 181-211.

¹⁰ 木村（1992） p.195-197.

- 3) 張麟声:日本語教育のための誤用分析:中国語話者の母語干渉 20 例. スリーエーネットワーク, 東京, 2001.
- 4) 吉本啓:日本語の指示詞コソアの体系. 金水敏, 田窪行則・編, 指示詞 (日本語研究資料集:第 1 期第 7 巻), ひつじ書房, 東京, 1992, 105-122.
- 5) 金井勇人:現場指示におけるソ系の指示語について一聞き手用法と中距離用法と一. 河正一, 島田雅晴, 金井勇人, 仁科弘之・編, 言語をめぐる X 章:言語を考える、言語を教える、言語で考える:仁科弘之教授退職記念論文集 (埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書別冊; 2), 埼玉大学教養学部・人文社会科学研究科, さいたま, 2017, 116-127.